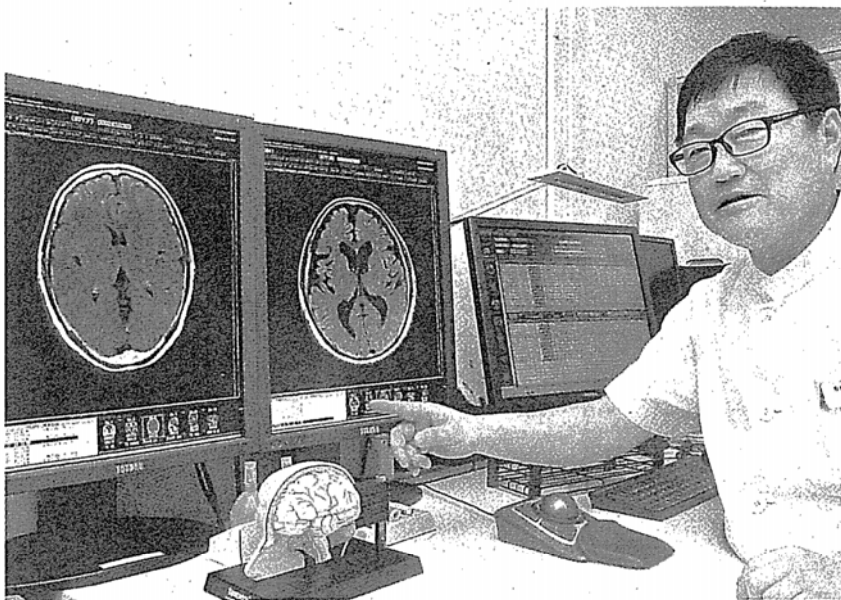


健康的“酒飲み高知家”に



多量飲酒をした人の脳(右)と健康な脳の写真を比べる「高知適正飲酒研究会」の朴啓彰代表
＝高知市知寄町2丁目

研究会ではドリンク開発のほか、アルコールのダメージを啓発するセミナーや、依存症の人の支援なども行う予定。

朴さんは、高知の酒席にある「飲む人がえらい」「飲まないといけない」という雰囲気や、「一人一人が適量を楽しく飲む」という考え方に变えたいとの気持ちを持っており、「体を壊すと飲めなくなる。酒を愛する高知が、飲み方でも全国のトップに立とう」と話している。

今月1日に発足した「高知適正飲酒研究会」。生活習慣と脳の関係を長年研究している高知検診クリニックの朴啓彰・脳ドックセンター長が、「脳の萎縮について詳細に検証し、適正な飲酒とは何か考え直そう」との考えから発案。高知県立大学の教員、県工業技術センター職員、酔鯨酒造の工場長の4人が参加した。

アルコールと健康の関係については肝臓へ

脳守るドリンク開発も

の影響が一般的に知られている。朴さんは、脳への影響も大きいことをもっと知ってほしいという。

朴さんは同クリニックで磁気共鳴画像装置(MRI)検査をした約5300人分の脳データを検証。毎日多量の飲酒を続け生涯で計200以上のアルコールを摂取した人は、アルコールを一切摂取しない人より約1・5倍のスピードで脳が萎縮していることが判明した。

酒席の前に市販のドリンク剤を飲むことを心掛けている人も多いが、「あれは肝臓を守るもの」。脳の専門家の立場から、「脳版」のドリンクを開発したいと意気込んでいる。

ドリンク開発は県工業技術センターや酔鯨酒造の意見も取り入れながら進めており、現在では被験者を募って効果の検証をしている最中だという。

啓発へ医師ら研究会

飲酒と健康の関係は、楽しくお酒と付き合うには、「酒飲み県高知」だからこそ考えようという研究会が、このほど発足した。メンバーには大学教員や酒造メーカーの社員も入っており、活動はセミナー開催などのほか、アルコールから脳を守るドリンク開発も視野に入る。

(竹内悠理菜)